

# 大学生の親子関係・家族関係及び自我同一性が友人関係に与える影響について

岡田奈々（指導：中村真教授）

キーワード：親子関係、友人関係、自我同一性、家族関係、青年期

## 目的

親子関係と青年の自我同一性の関連を検討した山本・岡本(2008)によると、両者は青年期以前から青年期後期まで継続して関連がみられるという。実際、大学生を対象とする調査によって親子関係と自我同一性の関連を検討した高橋(2001)は、両親との心理的距離が遠いほど、自我同一性の確立が低いことを明らかにしている。また、大学生が自我同一性を達成するためには家族関係も重要であり、幼少期と比べて現在の家族の凝集性が高いこと、そして、家族内の締め付けが弱いことが必要とされている(内田・越知, 2009)。

一方、自我同一性と青年の友人関係の関連を検討した堀岡(2010)は、同一性を確立している青年は友人と深く積極的に関わり、親密な関係を持つ傾向にあることを明らかにしている。

以上をふまえて、本研究では親子関係及び家族関係が直接または自我同一性を介して友人関係に影響しているのではないかと考え、大学生を対象とする調査を行いこれを検討した。

## 方法

江戸川大学生 103 名(男 49 名、女 54 名)を対象に 2014 年 7 月の講義時間内に質問紙調査を行った。

質問紙はフェイスシート、小高(1999)の親-青年尺度(5 件法、父母各 25 項目)、草田・岡堂(1993)の家族機能測定尺度(5 件法、20 項目)、谷(2001)の多次元自我同一性尺度(7 件法、20 項目)、安井・谷(2008)の友人関係尺度(6 件法、39 項目)を用いた。

## 結果

親子関係と自我同一性については、母親からのポジティブな影響因子と心理社会的同一性因子の間に有意な正の相関がみられ( $r=.42, p<.01$ )、家族関係と自我同一性では、家族適応性因子と心理社会的同一性因子の間に有意な正の相関が認められた( $r=.35, p<.01$ )。また、自我同一性と友人関係では、心理社会的同一性因子と友人への信頼因子の間に有意な正の相関がみられた( $r=.36, p<.01$ )。なお、父子関係についてはこのような関連はみられなかった。

次に、親子関係及び家族関係が直接または自我同一性を介して友人関係に影響しているのかを検討するために以下の分析を行った。まず、①母親からのポジティブな影響因子、②心理社会的同一性因子、③友人への信頼因子の 3 つの変数のうち 1 つ

を統制して残りの 2 つの偏相關係数を算出したところ、①と②で正の相関( $r=.34, p<.01$ )、②と③で正の相関( $r=.20, p<.05$ )、①と③で正の相関がみられた( $r=.28, p<.01$ )。また、④家族適応性因子、⑤心理社会的同一性因子、⑥友人への信頼因子についても同様に偏相關分析を行った結果、④と②で正の相関( $r=.33, p<.01$ )、②と③で正の相関( $r=.33, p<.01$ )がみられたが、④と③では関連がみられなかった( $r=.02, n.s.$ )。図 1 と図 2 は、これらの偏相關分析の結果に基づいて示したモデルである。

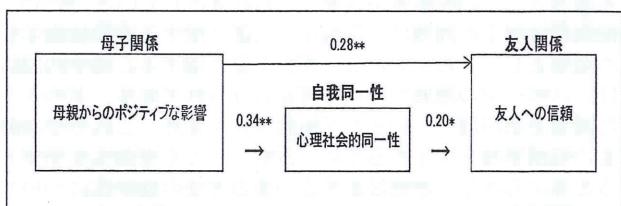


図1 親子関係から自我同一性及び友人関係に関連する要因(本研究の偏相關分析に基づくモデル)



図2 家族関係から自我同一性及び友人関係に関連する要因(本研究の偏相關分析に基づくモデル)

## 考察

結果を総合的にみると、母親からのポジティブな影響は直接かつ心理社会的同一性を介して友人への信頼に影響していることが示された。また、家族適応性は心理社会的同一性を介して友人への信頼に影響していることも示された。母子関係が比較的良好であるほど自我同一性の感覚および信頼を中心とする良好な友人関係を高めているのではないかと考えられる。また、家族関係においては家族が様々な状況に応じて柔軟に変化させることのできるシステムを有しているほど自我同一性の確立を促し、そして自我同一性は深い信頼関係に根ざした友人関係を導くのではないかと考えられる。

したがって、親子関係の良好さ及び家族適応性は、自我同一性を介して友人関係の良好さに影響している可能性が示唆される。今後の課題は、内田・越知(2009)で示された家族凝集性と自我同一性の関連が本研究でみられず、新たに家族適応性と自我同一性の関連が認められた理由を検討することである。